

平成26年度 知事と県民の意見交換会概要

テーマ：鹿角果樹の産地維持・振興について

日時：平成26年8月28日(木) 14:00～16:30

場所：鹿角市 佐藤秀果園

(知事あいさつ)

私には各分野の専門の方々から情報が入ってくることが多いが、一方ではこのような場を通じて直接現場の皆さんから意見を聞くことも重要と考えている。今日は、鹿角地域で果樹栽培をがんばっている若手の皆さんと意見交換できることをありがたく思っている。

現在、県政においては様々な課題があるが、全ての課題に県が対応することは難しい状況になってきている。今後は、県で対応できない分野はその分野の専門機関に橋渡しをして行ってもらうことも県の役割と考えている。

これまで秋田県の農業は米主体であったが、貿易が自由化され日本の米は海外ではそれほど売れない状況にある。一方では、日本の法人が海外で米の生産を行って販売している事例も多い。今後は、そのような状況も視野に入れて展開していくことも必要と考えている。特に加工分野は秋田県内で少ないので、今後伸ばしていきたいと考えている。

また、米以外の果樹や野菜などは生産量が少ないので、ブランド化を図りつつ、伸ばしていきたい、また「北限の桃」のような地域ブランドの生産振興にも取り組んでいきたいと考えている。

今日は、皆さんが今何を頑張っているのか、そしてこれからの夢を語ってもらい県政への意見として取り入れていきたい。

※知事あいさつの後、同会場にて、もも、りんごのほ場を見学。

【参加者自己紹介】

(A氏)

経営規模は3.5haで、リンゴが3分の2、モモが3分の1である。リンゴは、「秋田紅あかり」を主体に地域に合った品種に取り組んでいきたいと考えている。

平成に入って、仲間5人でモモの栽培に取り組み始めたが、市場の引き合いも強くやりがいがある。モモは管内の栽培面積を100haまで伸ばしていきたい。今年はモモの樹に衰弱が見られたが、平年並みの作柄を期待できそうである。

(B氏)

農業に携わって3年目である。小坂町でブドウ農場の臨時職員を募集していたので応募し、現在に至っている。今は研修段階であるが、やりがいのある仕事だと思っている。実家は非農家である。

(C氏)

秋田市出身で、7年前に鹿角の果樹農家へ研修に入った。2年の研修後、現在、1.5haを経営している。このうち、モモは50aである。モモは若木であるが、今年から本格的な販売に入る。

今年モモに衰弱、枯死の問題が発生し、関係機関でいろいろ対策等について話し合いが行われているが、対策の検討には若手も入れてほしい。

鹿角管内は経営規模が小さく、経営者数が多い状況と思われる。集約化の方向で検討されているが、私自身は、極力コンパクトな経営を目指している。

(D氏)

奈良県出身で、IT企業に勤めていたが、体調を崩し、温泉巡りの中で鹿角の果樹と出会った。最初の出会いのXさんの精果園で就農しているが、関わりを持ってから3年目、鹿角へ引っ越してから2年目である。

Xさんが13年前に導入したブルーベリーは、1.3ha、約2,500本から2tの収穫があるが、農協出荷なし市場出荷なし、全て個人のお客様に販売している。販売は量ではなく、質重視で進めている。一番大きなものでは500円玉くらいのブルーベリーが採れる。

(E氏)

会社勤めの傍ら家業のリンゴを手伝っていたが、23歳から本格的にやろうと就農した。リンゴ作りをしていて、つらいことは価格が期待を下回ったときである。しかし、その逆もあり、楽しみでもある。

(F氏)

祖父が大湯で観光リンゴ園を営んでいた。2年前に東京からUターンし、Eさんのところで研修を受け、今年から新規就農している。

(G氏)

四日市市で働いていたが、平成13年にリンゴ作りのため実家に帰った。リンゴは安値でたいへんだと思ったが、販売法を学ぶなどし、この4月に就農、現在は加工など商品開発も手がけている。リンゴ栽培はEさんのところで研修を受けた。

(H氏)

リンゴは母がやっており、手伝っていた。子育ても一段落したところでもあり、本格的に取り組み始めた。一段落したとはいえ子供はまだ小学生であり、外に働きに出るより農家が自分には一番合っていると思う。面積拡大を考えているが、子育てしながらできる農業を目指している。

(I氏)

リンゴ3ha、モモ1ha、米4haを経営しているが、今後は大面積の経営を視野に入れている。

農業関係団体の会長をやっており、県議会農林水産委員会との意見交換会の機会もいただいた。

【意見交換】

(知事)

リンゴの国内需要は落ちてきている。だが、米は東南アジアでも作ることができるが、リンゴはできない。リンゴは、タイに持って行ったところ非常によく売れた。ただ、一時の物産展だけでなく、経常的に売れるシステムがなかなかない。

また、リンゴ等の農産物と、加工品、観光との結びつきが少ないように思われる。

(A氏)

鹿角では、『でんぱく』という企画で、畑でアップルパイを作ろう等、いろいろな分野の結びつきによるイベントを実施している。

(知事)

他の業種と交わるのは、若い人の得意分野。

特に、異業種の人や秋田県人でない人の視点が重要である。また、新規就農の人には秋田がどのように見えるのか、新規の人の見方に注目している。

(D氏)

秋田は食べ物がおいしく、各農家も努力している。鹿角のものの良さを、秋田のものの良さをストーリーで売り込んでいくことが大切である。

情報発信では個人には限界があるので、県等の力添えがほしい。

また、鹿角は昼夜の温度差があり、水も良くて、災害も少ない。これほど農業に恵まれた地域はないと思っている。その背景と合わせて生産物を売っていくことが大切である。

(B氏)

ブドウは‘巨峰’やワイン用を作っているが、商品は鹿角市内で作っているので小坂にもワイナリーがほしいと考えている。

(知事)

鹿角でブドウが作られていることは、秋田市ではあまり知られていない。多く作るより、‘神秘性’のあるブドウが望ましいのではないか。

(C氏)

鹿角は小規模経営が多く、非効率であるが、自分は、大規模経営ではなくコンパクトな経営を確立したい。これからは企業の農業参入もあるだろうが、効率だけを求められることには抵抗がある。自分の考えた独特の技術で農業を経営し、顧客を得ていきたい。

(知事)

小規模生産でも、特色のあるもの、ストーリー性のあるものは、東京の一流レストランでも売られ、そのような市場もできつつある。どのようなストーリーをつくっていくかが大切である。大規模化では海外に負けるので、何でも大規模化ではなく、どう進めていくかが大切である。

(E氏)

我が家は5代続いているが、2代目からリンゴを始めた。父は研修生を受け入れているが、研修生を受け入れることで、自分もさらに技術を高めていけると考えている。

(G氏)

私は加工に興味があり、持久系スポーツでのエネルギー補給用として、リンゴ果汁を7倍に濃縮した商品の開発に2010年から取り組み、2012年に完成した。しかし、パッケージ設備がなく、県内にも対応できる会社がなかったので東京の企業へ依頼した。

鹿角市は「スキーと駅伝のまち」を掲げているので、私としては、鹿角リンゴとスポーツ

をつなげていきたいという思いがあった。しかし最終的にはコスト面で原料原価を下げざるを得ず、鹿角のリンゴを使うことができなかった。パッケージにも秋田の文字を入れることができなかった。依頼先にいいところ取りされた感じがある。

次の商品は、来年完成予定である。

(知事)

リンゴジュースを絞るところも県内にはあまりなかった。結局、地元にはないから大手に持って行かれる。県内には、特殊加工設備が少ない現状がある。

(H氏)

現在、畑を整地拡大し、果樹栽培の面積を広げている。

周りを見ると、高齢者は農業に従事しているが、次世代の若い人は、勤めに出て休日に手伝える程度である。今後、技術はどう維持されていくのか心配である。

子育てが忙しくて外に働きに行けない人が、小遣い稼ぎとして農業に携わる例が増えると思う。

(I氏)

約100人規模のスポーツクラブをつくっているが、リンゴ作りと共通する部分がある。もともと農家でない人をどのように取り込んでいくかも含めて、どのように農業者を増やしていくかを考えている。新規就農給付金の予算がついたことはよかったと考えている。雇用を取り入れるなどして、拡大していくことが重要と考えている。

農業者の中には、米では米価が1万円を切ると生産が難しくなるとの意見がある。生産効率を上げていく方向にあるが、それでダメであればどうするか、アドバイザーの力を借りるのも必要ではないか。県にはアドバイザーを増やしてほしい。

(知事)

昨日、米価は5千円まで下がるのではないかとある人が話していたが、5千円では大潟村でも無理がある。米は1万円前後が限界である。また、海外との対等な競争は、食糧安保の観点からも良いことかどうか。

加工については、原材料の価格と加工品の価格が連動しなくなっている。このことが加工品の難しさとなっているし、また工夫が反映される部分でもある。一方、原材料がしっかりしていないと、加工品も成立しない。行政も試行錯誤の状態である。

(I氏)

条件の良い農地が手に入らないという話を新規就農者からよく聞く。このことを解決する良い方法がないものか。

(A氏)

鹿角の良いところはいっぱいある。果樹だけでなく、野菜、花、畜産、米もある。これらを組み合わせた良いものを示していきたい。他から来ていただいたお客さんには、自分たちが感じない良いことを感じて帰っていただくことが多い。

(知事)

仙北市は、海外への観光の売り込みを盛んに行っている。長野のリンゴのオーナー制度では、海外の顧客も取り込んでいるところもある。果物には検疫があり海外へ送れないので、

毎年、中国からリンゴを食べに来て宿泊している例もあるようだ。

縦割りではなく、農業と商工業の情報交換の場を設けないといけないと考えている。

(E氏)

果樹は自然災害、台風、晩霜害などに弱い。万が一のことに対応が大変である。

人手不足でもあり、補助事業を活用して機械化を図りたいが、機械や資材なども高騰しており、一方で生産物の価格低下が著しい。農家数の減少は収入減が原因と考えているが、機械利用で効率を高め、人件費を削減していきたい。

このような中で、夢プランを利用したいと考えているが、(事業要件を満たしておらず)採択されていない。生産拡大のためには機械化が必要であるので、助成制度を利用しやすくしてほしい。

(知事)

機械化は、大規模農場でフル活用すればペイできるもの。

県でも助成制度の充実を検討しているが、今は農業経営の複合化や多角化にかかる予算に、より重点を置いている。

(E氏)

果樹では、機械の性能が良ければ風の強い昼でも農薬を散布できるが、価格が高い。

(知事)

高くても良いものをつくっていく。また、現状は市場に出るまでの中間マージンが高くなっているが、これをどう考えていくか。機械化や支援のあり方を考えていきたい。

(F氏)

農業のイメージを「暗い」から「楽しい」に変えていきたい。農業はスポーツであると思う。また、軽トラの色は白やシルバーが主流だが、色のバリエーションを秋田から発信していきたい。盛り上がると思う。

作業服も、種類が少なく、特に女性用が少ない。これも秋田から変えていきたい。

(知事)

軽トラは農業必需品である。最近ではピンク色も出てきている。

女性の野良着については、森英恵さんにデザインしてもらうなどすれば、話題性がある。そうした女性が手がけた作物も、美味しそうに見えるのではないか。女性の野良着のデザインコンクールでもあったら、おもしろい。水田用、果樹用、畜産用等のデザインを公募して作れば、県内の縫製工場も潤う。農協ごとに競ってもよい。そのイベントがまた交流の場にもなる。

軽トラについては、ダイハツとスズキ自動車に今度話してみたい。秋田県仕様なら1万円くらい高くてもピンクやブルーがあるというのもおもしろい。農家にはこういう遊びも必要。若い人は目が違う。最初から農業は「暗い」とすると、誰も来ない。

こちらでは、結婚、出会いの場などのイベントはあるか。

(I氏)

商工会で婚活イベントをしていたこともある。近日中に、知り合いが主催するイベントも開催される。

(知事)

後継者の問題は、自分の問題であり、自分の次の世代の問題でもある。秋田は、原因はよくわからないが、婚姻率が低い。必ずしも所得だけの問題でもない。県でも婚活施策を実施しているので、独身の方はぜひよろしくお願ひしたい。

また、10月4日から国民文化祭が開催される。県外から来た人には、果樹やジュースを味わっていただき、鹿角小坂のファンになっていただくよう、私からお願ひしたい。

(終了)